

内海愛子「野次馬イタヒー」
韓国・朝鮮人BC級戦犯の
補償要求運動は、
死刑になった人の無念の叫びに
支えられている。

7・1993
月刊フォーラム
FORUM
毎月9日（土）発行



チェック！ 大国 ニッポン

改憲・PKO・サミット

九条改憲を許さない、新しい政治運動を◎国富建治
カンボジアはいま、どうなっているか◎清水俊弘
「新世界秩序」を南からみると◎太田昌国
国連をどうみる、どうする◎武藤一羊

民衆のオルタナティブ戦略◎石見尚
東京モミット、日本の狙いは◎池田五律
カンボジア派兵長期化に論拠はあるか◎木元茂夫

「戦後思想の再統」清張「砂の器」、公房「砂の女」◎杉村昌昭

「国際ネットワーク」クルマ社会へ突進する中国

加藤哲郎

四月初旬、桜満開の東京を離れて、中国上海に行ってきた。上海にある復旦大学日本研究センター主催の日中国際シンポジウム「経済現代化における日本政府の役割」に出席・報告するためである。上海・無錫などでの「社会主義市場経済」への激動を目撃できた。

それは、巨大な商品経済化・工業化のうねりだった。上海の繁華街南京東路にはモノが溢れ、日本の電器製品も香港の化粧品もパリ・ファッションのブランドネーム抜き商品も、カラフルに山積みされてきた。八九年以前のソ連・東欧に見られたモノ不足や行列はない。その代わりに、溢れるばかりの人と自転車群れが、朝早くから夜一〇時の閉店まで続く。自転車の群れのなかに、クルマがクラクションを鳴らしながら突進する。日本で

の市民向け講演で、中国やインドがクルマ社会になったら地球生態系はどうなるかと訴えてきたが、大都市に限って言えば、すでに自転車社会からクルマ社会への移行は現実になっている。

しかし、人々の顔は明るい。活力がある。東ベルリンやプラハで見たあの憂鬱はない。もつとも外国人と「内地」からのおのほりさん用繁華街を離れて、人民公園から豫園へと地元の商店や市場を覗くと、その活気は、話に聞く敗戦直後の新宿鬧市や、メキシコシティで見た革命広場周辺の雑踏に近い。あらゆる種類の肉や野菜、原色の生地やボタン、すぐに壊れそうな玩具、一回洗濯したら脱色しそうなシャツやブラウスの山と人の群れだ。

年経済成長率五〇%という「現代化」

が進む無錫から、バスで江陰を訪ねる。かつての万元戸が今は十万元戸・百万元戸になったモデル農村だ。村営郷鎮企業の繁栄とともに、テレビ・ベットのルーム・応接セットつき三階建て住宅が並ぶ。

松下電器との合併会社が作ったヒット洗濯機愛妻号も、フォルクスワーゲンの自家用車もある。手作りで欲待された郷土料理の品数は、上海の豪華な飯店の回転テーブルに匹敵する。だが村の繁栄は、村人だけでは維持できない。周辺の村から労働力を導入して工場を動かし、揚子江を下って外国まで輸出する。当然地域格差は拡大する。村がそのまま多国籍企業になったかたちだ。

バスの往復では、毎日交通事故を目撃する。交通事故の死者はどのくらいになるのか、統計も整っていない。労働災害

も起こるのが当たり前だ。溢れる人間は労働力商品だ。いくらでも「内地」から都市へと流入して来る。大都市の駅前は大きな荷物を抱えた人々で溢れている。ニューヨークのホームレスの比ではない。インフレ率も一五%。この国ではない、一億の人々の壮大な移民・難民化が進行していることを実感させる。

上海郊外浦東地区は、自由貿易区を含む工業団地プロジェクトの突貫工事の真っ最中である。空気は汚い。クレインでのビル建築の隣に、駕籠をかつぎレンガを一つ一つ積み上げていく伝統的工法の住居づくり、その近くでは竹で組んだ足場の上からコンクリートを流し込む商店づくり。ブレ・フォード主義と初期フォード主義と後期フォード主義が共存しているが、私たちが案内される通りから一本離れると、ブレないし封建の様相が圧倒的である。黄浦江から揚子江への川下りで見えたものは、兩岸に連なる工場の列、商船・タグボート・軍船でぎっしりの波止場。軍事基地だけは写真撮影禁止。公害と環境破壊はすでに深刻だ。川鳥もカ

モメも見えない。環境規制など本当にできるのだろうか？

シンポジウムでの私の報告は、一〇日前の日韓連帯シンポジウムでも使った「過労死とサービスマン残業の政治学」(要旨は本誌六月号、詳しくは平田清明他「現代市民社会と企業国家」御茶の水書房、近刊)。会議全体のトーンは日本領事館のアタッシェが臆面もなく述べた「社会主義市場経済化のために日本の官僚主導型経済成長・産業政策から多めに学んでもらいたい」である。だから私の報告は主催者側を狼狽させ、中国の日本研究者・学生を驚かせた。その主催者側の意を受けて、日本人出席者のなから高名な経済学者が立ち、「日本の過労死は労働が疎外されていないから起こる。中国にいま必要なのは過労死するほど働くことだ」と火消しに回る。

一昔前の文革期に訪した日本の学者たちは、文革を礼賛し日本政府を非難したそう。攻守は変わっても、国際交流の仕方は同じなようだ。ここでは日本の高度成長を讃え政府主導の産業政策のノ

ウハウを教えこむことが重要で、労働政策や環境政策・都市問題を紹介してはいけなかったようだ。そんな雰囲気なのかでは、政治の民主化や一党独裁はタブーである。「誰が支配しているか」を抜きに政府主導の産業化の討論が続く。開発独裁という言葉が浮かぶ。公式の会議そのものは、学ぶところ少なかった。

これまで八時間労働だった国に、セカンド・ジョブが広がっている。中国も公害・過労死社会に突き進んでいる。私は過労死という言葉を中国語に訳させただけで満足することにした。だが経済の市場化は、確実に情報公開と政治の民主化志向をも強めている。会議の合間の宴席で、近隣見学旅行の旅先で、中国の若い研究者たちは日本政治の実際と経済成長の陰にも質問を浴びせた。「企業国家と福祉国家の違い」とか「中国における市民社会の可能性」とか。ここにむしろ中国社会の希望があるので、と感じさせる旅だった。

【かとう・てつろう】一橋大教授(政治学)。